

原風景～ ラヴェル「スペイン狂詩曲」

僕にとっての原風景は、2つある。それが、現実の風景だったのか、それとも、いつの頃に想像されたものなのか、今では僕自身にも分からなくなってしまった。

原風景とは、自分にとって重要な意味を持つ風景、とでも言ったらいいのだろうか。

1つ目は、小学生の頃行った（と思われる）公園の風景だ。その公園は、僕の住まいからはかなり離れていて、バスで行かねばならない場所にあった（と、これも定かではない）。

その公園は、一方が崖の下に位置している。その崖の上にはアパートがある。ブランコや滑り台、それに砂場などがある、ごくありきたりの公園の風景なのだが、その崖の存在が非常に気になる。赤土を剥き出しにし、今にも崩れてしまいそうなその崖の上にアパートがある、という不安定さが非常に気になる。

私が小学生の頃は、よくこうした赤土の崖が見られた（最近では、そうした崖にはコンクリートで土留めがされてしまっていることが多い）。同様に、これから何かに使われようとするために整地された、何もない赤土の空き地もたくさんあったように思う（こちらの方は、最近では、砂利がしかれていたり、雑草に覆われていたりするものの、かつて何か建っていた、と思わせる空き地が多い）。そんな空き地で、自転車の練習をしたり、遊んだりしたものだ。

あるいは、この赤土剥き出しの風景が、私のひとつの原風景なのかもしれない。

2つ目は、海岸沿いの丘に行った（本当に行ったのかどうか、これも定かでない）ときの風景だ。その丘は低い草に覆われていて、草の上に寝転んで空を見上げたり、180度、海の眺望を手にすることができる。その爽快さが、この原風景の中には常に感じられる。

さらに、その丘で寝転ぶ僕が振り向くと、丘の斜面に、まるで階段のように、段段になって家が数件連なっているのだ。しかも、まるで物置小屋のような小さな家。僕がその家に近づいても、まるで人の住んでいる気配が感じられないのに、洗濯物が干され、生活の小道具類がきちんと整頓されて並べられている。さっきまで僕が歩いてきた道ともつながっていない、まるで世界から隔絶されているかのような家々…。一体どうして、この風景が目には浮かぶのか…。

この風景は、特に最近頻繁に胸に浮かんでくる。場所も、何となく覚えているので、近々行ってみようと思っている。

この曲の前半部分の、神秘的で静寂に満ちた音楽は、この2つの原風景を呼び起こす。原風景に再会すると、なにか、心がひんやりと冷やされる気がするのだが、この音楽もそんな響きを持っている。